

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

## 新たな四半世紀に向けて

RCCセンター長 打樋 啓史

今年度、キリスト教と文化研究センター（RCC）創立二十五周年記念事業の一つが計画通り実施され、豊かな出会いと実りを与えられました。講演会やフォーラムにご登壇くださった方々、また準備・運営のためにご尽力くださった皆様に、センターを代表して心から感謝を申し上げます。Newsletter 本号では、前号で取り上げられた「創立二十五周年記念フォーラム」（五月二十日）以降に開催された記念講演会、また記念事業の核であった書籍『キリスト教で読み解く世界の映画』の出版とその出版記念フォーラムについて報告されていますので、ぜひご一読ください。

今年度、キリスト教と文化研究センター（RCC）を通じて、「平和の文化（A culture of peace）」の一端を担う」というRCCの使命とビジョンが改めて明示されました。新たな四半世紀を迎えるRCCが、この原点に立ち帰って、キリスト教の視点から、現代社会の諸課題についての調査・研究活動をさらに推し進め、深めていくことができるように、またその成果を種々の形で内外に共有・発信していくことができますように、願ってやみません。人類の分断が深刻化するこの時代にこそ、この研究センターの働きが、平和に資する新しい知の枠組を創出するための一歩となることを心から願います。皆様のお祈りとご支援を今後ともよろしくお願いいたします。

## RCC 創立二十五周年記念講演会

### 「福音家族」は世界を救う

講師 カトリック浅草教会・上野教会主任司祭 晴佐久 昌英

二〇二二年十月四日、浅草教会、上野教会の司祭である晴佐久昌英神父を講師に迎え、「『福音家族』は世界を救う」というタイトルでお話していただきました。以下は、講演の要旨です。

二〇二二年十月四日、浅草教会、上野教会の司祭である晴佐久昌英神父を講師に迎え、「『福音家族』は世界を救う」というタイトルでお話していただきました。以下は、講演の要旨です。

人で砂浜の上にタオルを敷いて寝て、ふと夜中に目覚めたら満天の星が目の前に広がっていました。私が誰であるのか、ここがどこであるのかもわからずに、ただ大宇宙と向かい合った瞬間。「大いなる力」はすべてわかっていて、何となく人間に自分を現そうとして

働いているという感覚を若い頃からずっと感じていました。神が働いているということ、本当に信じ、神がどうしてほしいかということ、胸に手を当てて考え、感じ、信じるならば、強制的に向こうからやって来るもの。それが私にとって福音家族の活動です。

私は毎年無人島でキャンプをしています。この夏一人で無人島に泊まりました。一





います。若い方々に是非この力を感じ取っていただきたい。私は三十五年間、大勢の若い人たちを連れて無人島に行っています。無人島で「福音家族」を一番深く感じます。無人島は隔絶された一つの小さな世界ですから、地球のミニモデルのようなです。ごみを散らかすとすぐ汚れる。そこで採れる、サザエやヒラメは、少ししかないので本当に平等に分かち合わなければならぬ。誰か一人がガブガブ水を飲んで、他の誰かが喉が渇いている。そんなことはあり得ない。

これが地球上だとあり得ます。なぜでしょう？夜、真っ暗な無人島にタープを張り、流木でテーブルを作り、冷たいビールを置いて、サングラで作ったかまどで採れた魚を焼き、皆で分けあう。用を足しに行つて帰つてくると、満点の星の空の下、皆がランタンの火を囲んで共にご飯を食べていて笑い声が聞こえる。思わず涙が流れました。これ以上に何もありません。ここにあるのは大いなる働きへの信頼と皆でそれを共有できるという思いです。「福音家族」は、血縁を超え、家族同然にご飯を食べているような仲を指します。イエスの周りには徴税人、娼婦、障がいをかかえている人、やもめたちが集まりました。宗教は、この世界に何も適応せずともよいこと、大いなる力による呼びかけに耳を澄ませ、お互いに純粹に分かち合つて平等にやっつけていけばよいことに気づかせます。今の時代に一番必要なのが宗教です。



イエス様がなさったことは血縁を超えた仲間づくりです。皆で天国に向かうというのが人類の本質です。そのためにまずシンボルとして一緒にご飯を食べた。イエスは、明日もう殺されるといふ前日に、この食事をこれからも続けてくれと遺言を残して死んでいった。それで教会では二千年経つても食卓を置いて、皆で囲んでいます。天国は、死んでかいらいくところではなく、生きているうちにもう始められます。今晚からでもできること

は、いただいた恵みを分かち合うことです。

私が「福音家族」で最初に作ったのは、心の病や生きづらさをかかえた若者たちと共にご飯を食べる集まり「ここヤシの集い」です。生きづらい若者が増えたのは、世の中が本当に生きづらい証拠です。この集いを始めて十五、二十年近く、天国を感じて味わってきました。いろいろ大変ですけれど、家族だから一緒にいたい。しかし、血縁の家族がむしろその人を苦しめている原因にもなります。それは本当の家族になつていないからです。そのような時には、血縁の家族を超えたちよつと大きな家族を作つて、そこにお迎えすればよいのです。

最近の活動の中心となつてゐるのは「うぐいす食堂」で、ひと月に一度、路上生活者の人々と一緒にご飯を食べています。「福音家族」は、もし血縁ならどうするかを考えます。血縁かそうでないかによって、

そこまでは大きく縛られるのでしょか。血縁以上の大きな集まりがあるからこそ、人類はここまで来ました。本来の人類の在り方を取り戻そうとしているのがキリスト教であり、「福音家族」の考えです。

このような講演でちよつとヒントになるようなことを言えば、それは必ず拡がってきます。皆の心の中にそういう思いがあるからです。そのきっかけが「一緒にご飯」です。そこには不思議な力が働いています。それは人類何十年の歴史に刻み込まれ、我々の遺伝子に刻み込まれている「分かち合いたい」という衝動です。人間が本当にお互いを知つて信頼しあつて、信頼と共感ができるのはせいぜい一五〇人。その一五〇人のチームがいくつも有機的に繋がつて、新たな世界作りをしていくことで人類が救われる。私はそう確信しています。

(報告者主任研究員東よしみ)

『キリスト教で読み解く世界の映画——作品解説 110』  
出版記念フォーラム

## 映画『教誨師』を読み解く——二つの視点から

登壇者 映画助監督

中学部教諭・宗教主事

司会 RCCセンター長

古畑 耕平

福島 旭

打樋 啓史

一九九七年に創設されたキリスト教と文化研究センター（以下RCC）の二十五周年記



念事業である『キリスト教で読み解く世界の映画——作品解説 110』（キリスト新聞社）の出版を記念し、二〇二三年一月十六日（月）に映画『教誨師』（二〇一八年）についての座談会が開催されました。打樋センター長が司会し、同映画の助監督を務めた古畑耕平氏（本学社会学部社会福祉学科、現・人間福祉学部卒業生）、福島旭・関西学院中学部宗教主事が登壇しました。

古畑氏は、関西学院大学で学んだ経験も踏まえつつ映画製作に取り組んでいることの意味を語りながら、『教誨師』の脚本・監督を担当した佐向大



きる」「寄り添い」などの意味を問うていることを紹介され、自身も学生時代には曖昧だった「共感」の意味を深く考えたこと、主役がプロテスタントの牧師という設定なのは、カトリック司祭や仏教僧侶よりも一般人への親近感が高いためであることなどを紹介されました。

福島氏は、教会の牧師の傍ら教誨師の支援活動に携わった経験や、現在も保護司として活動したり、青少年の更生保護に関わるボランティアグループの顧問をされたりしている経験から、映画『教誨師』に描かれているキリスト教教誨のあり方のリアルさ、特に自分の罪をすべて社会悪が原因であるとするとする人の存在や、死刑囚だけでなく教誨師も同時に「罪」を「わたし」のこととして向き合っていること

の重要性、ヒムプレーヤー（賛美歌自動演奏機）がキリスト教の立場からみても小道具として巧みに用いられていること、

教誨の結果としてどんなに罪を悔いるようになっても刑が変更されたり社会復帰したりできるわけではない死刑囚に向き合う教誨の意味、キリスト教の教理を教えるよりも「傍らに立つ」ということの重要性を実感していることなどを指摘されました。

会場からは実際に教誨師として活動している本学神学部卒業生の牧師からも質問がされるなど、活発な議論が行われました。

（報告者センター副長加納和寛）



## 「ことばの力」—キリスト教の視点から— 公開研究会報告

「この聖書の言葉は、今日、実現した」（ルカ四・二十一より）

— 典礼における神のことば —

講師 宮越 俊光 日本カトリック典礼委員会委員



十一月十五日、カトリックの典礼学者・宮越俊光氏をお招きして公開研究会を開催し、十五名が参加した。カトリック教会の『ミサの式次第（二〇二二新版）』の作成に関わられた宮越氏は、そのポイントにも触れなが

ら、カトリックの典礼における「神のことば」の役割について分かりやすくお話しくださった。

第二バチカン公会議による典礼の刷新において、「神のことば」すなわち聖書の言葉が最も重要な基盤とされたことは周知の通りである。『典礼憲章』（一九六三年）は、聖書の言葉におけるキリストの現存を強調し、「聖書に対する愛情のこもった活き活きとした心を養う」必要性を呼びかけ、この勧告は典礼暦年に基づく聖書日課の大幅な整備・改訂に結実した。神のことばの「行為遂行的な特徴」のゆえに、



典礼での聖書朗読は単なる書物の朗読ではなく、救いの出来事のアナムネーシス（現在化）という意味をもつ。一方、説教は聖書の朗読による救いの現在化に仕えるものとしてその意味が再評価された。

出来事としての神のことばに基づく今日のカトリックの典礼論・教会論は、エキュメニカルな次元で、すべての教会が礼拝の本来の中心である神のことば・聖書の言葉に目を向ける重要な鍵を与えてくれるものであると、宮越氏のお話から強く感じさせられた。  
(報告者センター長 打樋啓史)

## 新刊紹介 『ことばの力—キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』

(キリスト新聞社、2023年3月22日)



本書は、二〇一九年に立ち上げられたRCCの共同研究「ことばの力」プロジェクトの成果のひとつとしてまとめられた論集です。このプロジェクトでは、幅広い時代を背景として人物や実践、事柄などに焦点を当て、神学、社会学、史学といった学問の立場に根差す多角的な側面から「ことば」へのアプローチを試みられました。図らずもこのすべてに共通するのは聖書のことばです。長い時間のなかで人間はそのことばをいかに捉えるか模索してきましたが、そのことばこそが人を捉え、導き、育て、癒し、そして人を救うものです。本書には、このことばに向き合い、自ら立てた問いへの応答を様々な現象のなかにも模索し進められてきた個々の研究のうち、七編が収載されています。  
(主任研究員 梶原直美)



関西学院大学キリスト教と文化研究センター（以下RCC）は、二〇二三年一月にキリスト新聞社より『キリスト教で読解く世界の映画―作品解説110』を出版することができました。本書は、二〇二二年四月に創設二十五周年を迎えたRCCの記念事業の一つであり、二〇一九年度から開始されたRCCの研究プロジェクト「映画とキリスト教」の成果です。関西学院とそのキリスト教主義に関わりの深い学内外の計三十六名の執筆

者のご協力のもと、本書を出版できたことを心より感謝しております。すでに本書の中で触れておりますが、本書の紹介のために、ここで改めてその特徴をいくつか挙げておきます。まず、ほぼすべての解説が、広くはキリスト教を専門とする研究者、キリスト教の働きの従事する人々によって記されている点を挙げるができます。それらの人々による解説によつて、単に映画を視聴するだけでは気づくことの叶わなかったキリスト教に関わる多くの新しい視点を映画に出すことができるはず。次に、本書では、古典的作品のみならず、キリスト教に

### 新刊紹介 『キリスト教から読み解く世界の映画 ― 作品解説 110』

(キリスト新聞社、2023年1月6日)

関わる二十一世紀の多くの新しい映画を取り扱っている点が挙げられます。比較的新しい映画とそれについての解説をも通して、今日の世界におけるキリスト教の意味やあり方を捉え直し、人間と世界を新たに見つめる機会を得ることができるのではないのでしょうか。付言すれば、取り上げられる映画におけるキリスト教の取扱いの幅広さも指摘することが出来ます。本書が取り上げる映画とその解説によつて、時代、国や地域、教派や神学的立場の違いを超えた多彩なテーマやイメージに触れることが可能です。

最後に、本書は一一〇本の映画を取り上げながらも各作品の解説を見開



き二頁に収めており、読み物としての、そして学びの素材としての用易さを重視した点が挙げられます。個人やグループで、そして、もしかすると教育に関わる場面と本書を用いる際、この点は有効に作用するでしょう。本書を通して、映画を「キリスト教で読み解く」楽しさを味わっていただければ幸いです。

(主任研究員橋本祐樹)

### 編集後記



三月末で、現センター長室メンバーの任期が終わります。この四年間、大学の研究や教育、チャペルアワーは大きく変わりました。近い将来、配信動画を一・二五倍速で視聴するのが授業やチャペルアワーの形態の一つになるかもしれません。そうなったら私たちは、緑豊かなキャンパスやチャペルを持つ意味を明確に示さなければいけなくなるでしょう。

リモートは悪い面ばかりではありません。コロナ禍でキリスト教講座や公開講演会を開催できなかつた時期もありました。ですが今では、ほとんどの研究会や講座が対面・リモート併用となり、より多くの方にご参加いただいています。また研究会は、遠方から発題者をお招きしたり、参加者の都合にあわせて遅い時間から始めたりできるようになりました。

(T.O.)